

巻 頭 言

会長就任ご挨拶

愛知県小児科医会
会長 志水 哲也

愛知県小児科医会は昭和34年（1959年）に佐野寅一先生を会長として発足し、今年10月25日に満46年となります。人生にたとえれば、満46歳は一番脂の乗り切った時でもあります。このような大切なときに、医会の発展のため非常にご尽力賜りました、前会長・杉浦壽康先生の後を受け会長のご指名を受けましたことは、誠に光栄なことではありますが、その重責に身の引き締まる思いであります。

正直なところ、このような大役をこなすことが出来るか否か、不安ばかりで御座います。幸い副会長をお引き受けいただきました久野、深田、宮田、平谷各先生はじめ、理事の諸先生方は実行力のある有能な方ばかりで、小児医療に對しまして熱い情熱を持った方ばかりで御座います。

このような皆様のご意見を賜りまして、諸先輩の築いてこられた素晴らしい当小児科医会を、より一層楽しく、明るく、充実した医会にするため努力してまいりたいと考えています。諸先生方にはなにとぞ活発なご意見、ご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

さて、小児科医会としましては、このような少子時代を迎え、われわれ小児科医師に求められるより良い小児医療とは何か、それを実行するにはどのようにしたらよいのかなどについて考え、さらにそれを実行してゆく必要があります。その第一はわれわれ小児科医自身の問題であり、第二は小児科医に対する社会のニーズであります。

第一の課題として、少子化による経営の問題、低い診療報酬の問題、小児科専門医としてのQOLの向上の問題、大学や市中病院の小児科勤務医の低報酬による過重な労働、小児病棟の閉鎖、小児救急の問題などが挙げられます。

第二の課題として、小児科医師に対しての社会のニーズとして、ただ単に疾病を診るだけではなく、少子化対策や、家族構成の変化による育児の崩壊、育児不安、子どもにとって寂しい家庭の増加、これらに対する子育て支援、さらには子どもの心の問題、虐待、非行、不登校、引きこもり、ニート、さらには思春期の性の問題や薬物など多くの問題に対しても、将来を見据えた小児科医の参画が必要となっておりました。さらには女性の社会進出にともない保育への要望も強く、一般保育の他に、乳児保育、延長保育、病児保育、障害児保育などのニーズが益々高まってきており、園医としての小児科医の重要性もよりいっそう増してきていると思います。

以上のような問題に対し、日本小児科医会、日本小児科学会、日本小児保健協会による小児医療の包括的法律（小児保健法）制定へ向けての動きがあり、日本小児科医会では、小児医療の量から質への転換による少子化対策としての子育て支援の充実と医療経営の健全化を目指して、“小児医療提供体制改革のグランドデザイン”が提示され、討論が続けられているところであります。われわれもこれらの議論に積極的に加わり、小児におけるより良い医療環境が作られるように努力すべきであると考えます。

ところで最近、ご承知のように予防接種施行令・予防接種実施規則の改悪（と言って良いかと思えます）がなされました。BCGの問題、麻疹、風疹未接種児の問題、百日咳罹患後のDPT接種の問題、日本脳炎ワクチンの唐突な勧奨中止など誠に不可解としか言いようがありません。この過渡期となる小児に対する救済は、厚生労働省からの通達という形で地方行政に委ねられており、これに対しましては各地区の医師会などを通じて、地方行政への積極的な働きかけが必要であると思われれます。是非各地区におきましても、子どもたちの幸せを第一に考え、行政に対して幅広い救済措置を実行して頂けるように、頑張ってくださいことをお願い致します。

さてこの原稿を書いている9月初め、「自然の叡智」をメインテーマにこの愛知県で開かれました万国博覧会「愛・地球博」もまもなく閉会を迎えようとしています。環境に配慮した会場作り、環境負荷の少ない交通手

段や新エネルギー、楽しみながら環境について学ぶ機会の提供など、様々な施設や展示などが紹介されてまいりました。現在、地球温暖化など世界を取り巻く環境は悪化の一步を辿っているといっても過言ではありません。また世界の各地では大災害が相次いであり、地球をないがしろにしてきた、我々人類の責

任が問われています。

未来の子どもたちが住みよい地球環境を守るために、我々小児科医としてもできる限り関心を持って取り組んで行かなければならないと思います。先生方のご協力を重ね重ねお願いしご挨拶と致します。